



母親たちと協力して、子どもたちに給食を配膳する知花さん。一つのお皿に盛ったものを4人で分けて食べる

特別レポート

文・写真=宮原千絵 (JICA広報室広報課長)

知花くららさん 夢と未来を探して in エチオピア

WFP国連世界食糧計画のオフィシャルサポーターとして、国際協力の現場に足を運んできた知花くららさん。アフリカの真の姿を日本人たちに伝えたい。そんな思いで訪れたエチオピアで彼女が見たものとは。

栄養を取って子どもたちに元気いっぱい学んでほしい。エチオピアでは国際機関やJICAが栄養改善の支援に取り組む

ガ タガタガタ……。未舗装の道路を、土ぼこりを舞い上げながら四輪駆動車が進んでいく。その脇を荷物を抱えて歩いているのは現地の子どもたち。背丈はタイヤの高さと同じくらいだが、その姿はなんとたくましい。ここはエチオピア北部のラリベラ。人口2万人ほどの小さな町は、エチオピア正教会の聖地だ。巨大な一枚岩を彫り抜いて造られた「岩窟教会群」は、世界遺産にも登録されている。

乾期の真ただ中の2月、ラリベラの空港から車で約2時間。でこぼこ道を行く車中にいたのは、モデルの知花くららさん。大学時代に教育学を学び、今も国際協力活動に積極的に取り組む彼女。WFP国連世界食糧計画のオフィシャルサポーターとして、「なんとかしなきゃプロジェクト」※1にも参加している。今回エチオピア訪問の機会を得て、「この国が抱える問題とその原因、現地の人々の挑戦をこの目で見てみたい」と話していた。近年、経済成長が著しいエチオピア



でも、いまだ貧しい生活を送る人々がいる。そんな地域で妊産婦・乳幼児の命をつなぎ、子どもたちの夢を紡ぐためには、学校給食の普及や栄養改善が必要不可欠。その支援を行っているのがWFP国連世界食糧計画やJICAだ。

地元の小学校を訪れると、子どもたちが歌と踊りで盛大に歓迎してくれた。彼らが元気いっぱい学べるよう、授業中に給食を作るのはお母さんたち。この日のメニューは、トウモロコシと大豆の粉をお湯と少しの油で煮込んで、塩で味付けしたもの。十数種類のビタ

て植林活動を続けているのだ。彼らの活動拠点の一つ、ラリベラ小学校を訪問し、環境クラブのメンバーと一緒に苗木を植えた知花さん。「エチオピアが緑に覆われて、地球温暖化がなくなっしてほしい」。子どもたちのこの言葉には知花さんも感心することしきり。教育の大切さを痛感していた。

と西田岱輔JICA専門家は語った。このカイゼンの導入を強く働きかけたのが、メレス・ゼナウイ前首相だった。2009年にJICAのプロジェクトが始まり、2011年には政府機関として「エチオピア・カイゼン機構」を設立。「社会・経済・技術の面で大きな変化をもたらす可能性がある」と、カイゼンの効果を力説するゲタワン・タデッセ所長の言葉から、エチオピアに日本人の精神が根付きつつあることを実感した。

さまざまな課題に直面しながらも、成長を夢見て奮闘する人々もいる。そのきっかけとなったのが、日本の手法を手本にした、通称「カイゼンプロジェクト」※2など、高度経済成長を支えた取り組みを通じて、品質・生産性向上を図っていくというものだ。

また、エチオピアが取り組もうとしているのが「チャンピオン商品」の推進だ。このアプローチは、地元ならではの素材と技術を生かし、エチオピアに対して良いイメージを連想させる高品質な産品を作り、海外に売り出していくというもの。現地デザイナーのフィクルタ・アデイスさんは、「母国の魅力を伝えられるようなドレスを世界に届けていきたい」と、2人の子どもを育てながらドレスを作っている。必要最低限のものさえあれば十分幸せになれる。国を愛し、未来を語りながらふと涙を流す彼女に、知花さんも心が揺さぶられた。



[上]フー太郎の森基金の活動に参加し、子どもたちと一緒に苗木を植える
[右下]カイゼンの指導を行うのは、途上国でカイゼンの指導を始めて18年の西田さん。現地の人々が主体的に取り組めるような仕組みづくりに力を入れる
[左下]知花さんは青年海外協力隊の活動も視察。お遊戯を通じて学びの場をつくることに取り組む清水紀子隊員(幼児教育)の説明を聞く

知花さんは、カイゼンを導入したばかりのプラスチック工場を視察。1カ月前まで機材や工具が散乱していたのが、見違えるように整理整頓とんされていった。製造マネジャーのベテル・ナホサナイさんは「カイゼンを継続すれば劇的な変化が期待できる」と自信ののぞかせる。「上からの指示ではなく、まずは現場で何が問題かを話し合い、みんなで考えて改革していくことが大切」

今回の旅を通じて、厳しい現実の中で、夢に向かって一歩一歩進むたくさんなの人たちに出会った知花さん。「大人たちの背中を見て、子どもたちは大きな未来を描けるのではないだろうか」と語った。人々のエネルギーがこの国を動かし、さらに大きな可能性とたくさんの笑顔が育つことを願っている。

※1 途上国の現状について知り、一人一人ができる国際協力を推進していく市民参加型プロジェクト。実行委員会は、NPO法人国際協力NGOセンター(JANIC)、JICA、国連開発計画(UNDP)。
※2 整理、整頓、清掃、清潔、しつけの頭文字。製造業・サービス業などの職場環境改善のための取り組み。